

## テーマ 『4技能の総合に基づくコミュニケーション能力の育成』 ～英語を自分自身の言葉として使うことを目指して～

### I テーマ設定の理由

本校では「言語活動の充実と道徳教育の推進～学び合い・高め合う教育の実践」という研究主題のもと、各教科で研究を進めている。今年度は、5つの言語活動の要素【感受・表現】【理解・伝達】【解釈・説明】【評価・論述】【討論・協同】のうち、「説明する活動」に焦点化して取り組んでいる。英語科においては、言語活動とは英語を使ってコミュニケーション活動を行うことそれ自体であると捉えることができていると考えている。（教科における「説明する活動」に関してはⅡ-1に示す。）英語科においては、言語材料が非常に限られるという制約があるため、あるテーマについて英語で理由や根拠を示して説明したことについて、さらに議論を深め自己と他者の思いを比較検討しながら吟味したりすることは中学校段階においては非常にハードルが高いためである。

新学習指導要領では、小学校段階での外国語活動を通じて、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度等の一定の素地が育成されることを踏まえ、「聞くこと」「話すこと」の領域にかかわる記述に盛り込まれていた「慣れ親しみ」という文言が削除され、併せて「読むこと」「書くこと」の指導の一層の充実を図るための内容が明記された。「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりすることができるよう、書かれた内容や考え方をとらえる」、「身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書く」、「自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して書く」ためには、自分の言葉として英語で伝える技能や態度が重要である。習得した表現を駆使し、相手に理解してもらうための様々な工夫をして伝える攻略的能力や、相手の意向や考えを何とかして理解しようとする態度である。

そういった技能や態度の育成のために、たとえ教科書から借用した表現であっても、生徒自身がその事柄について発信したいと思う気持ちをわきおこるような場面設定をし、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能をバランス良く取り入れながら様々な言語活動を行うことを通して、自分の言葉で真のコミュニケーションができた実感させたい。そこからさらにコミュニケーションへの関心・意欲を向上させることにつなげていきたいと考える。

### Ⅱ 本年度の研究について

コミュニケーション能力の育成の具体的な手立てとして、自分の気持ちや考えなどを相手に伝える自己表現能力の育成が必要であると考え、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能をバランス良く育てるための効果的な指導方法について、以下のような研究・実践に取り組んでいる。

#### 1. 言語活動の充実

英語科においては、自己表現活動を行う中に、自己や他者と関わりを持ちながら自分の考えや思いを伝える手段としての言語活動が存在するととらえている。言い換えると、自分の思いを英語で発信すること、自分の考えをまとめること、人前で自分の思いを伝えること、発信した後の友達の反応を見ることなどの自己表現活動を充実させることが、言語活動を充実させることと直接結びついていると言える。そういった自己表現活動は、「聞く」「読む」「話す」「書く」活動がそれぞれ単独で行われるのではなく、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識や情報などを自らの体験と結びつけて「話すこと」や「書くこと」を通じて発信するといったように、4技能を総合的に扱い、それらが有機的に結びつく活動になるよう工夫している。

学校全体の取り組みとして、昨年度、教科における言語活動の具体例をIで示した5つの要素に分類・整理したことで、英語科教員それぞれが普段行っている自己表現活動がどのような言語能力の育成を目指すものであるかをより意識して授業に取り組むようになってきた。本年度の研究テーマとして焦

点化している「説明する活動」について、英語科では、言語材料が非常に限られているという制約のもとで、各学年の生徒のレベル・興味関心に応じ、自分の考えや意向・事実などを、相手の意向をふまえ、理由や根拠を示しながら伝えることと捉え、取り組んでいる。以下にその実践例について示す。

【説明する活動の手順例】（グループ内で自分の好きな有名人などを説明する場合）

1	自分が大好きな有名人やキャラクターを選ぶ。
2	その人物について根拠を明確にし、相手に納得してもらえるように説明文を書く。
3	相手に正確に伝わるよう様々な工夫をして話す。
4	発表を聞いた後、互いにコメントを書き合う。またコメントを読み合う。

【説明する活動の実践例】

学習内容	活動の具体例
Who am I?クイズ	自分の好きな有名人やマンガやアニメの登場人物について、その人物になったつもりで説明させ、クイズ形式で問答を行う。
道案内	和歌山市内のマップを見ながら、ある地点までの道順をペアの相手にたずねたり、説明させたりする。
日本紹介	京都の観光地で外国人に京都の歴史や名所の魅力を説明させる。
	日本独特の文化について説明文を書き、ALTに説明させる。

## 2. 協同学習の実践

「①ペアやグループの中の一人のメンバーの学習が、他のメンバーにとっても利益となっているか。②ペアやグループで学習することに必然性があるか。③グループだからこそ課題解決することができたという卓越性があるか。」の3つの視点に基づき、協同学習を実践している。毎年教員が入れ替わる中、学校全体として教師サイドの協同学習への理解と実践力の維持にも努めながら進めている。具体的活動としては、ジグソーでの長文読み取り・難易度が高めの聞き取り・個人の役割を明確に分担しての英作文などがあげられる。協同学習を積み重ねるにしたがい、また学年を追うにつれて、教科の力の高まり



だけでなく、生徒間の信頼関係や自主・自律の高まりなどの効果が表れてきている。3年生ともなると、生徒サイドも協同学習の形態に十分慣れ、助け合いながら自主的に学びを高めようという雰囲気が育ってきている。自己表現活動には、クラスや班の中に安心できる雰囲気があること、自分の居場所が感じられ、仲間の個性を認めあえる集団になっていることが必要不可欠である。協同学習の形態は、信頼関係に基づいた自己表現活動を充実させる上で、なくてはならない学習形態であると言える。

## 3. 外国人との交流活動

1年生では、ある程度表現力が身についてくる3月頃に本大学の留学生との交流事業を行っている。アジア系の学生も多く来校し、生徒達は互いに英語を母語としない者同士でも英語を介して交流できることの楽しさ、素晴らしさを実感してくれた。2年生では、外国人観光客の多い京都の観光名所で外国人にインタビューをしたり、京都の歴史や名所を紹介したりする活動に取り組んでいる。3年生は、今年度はじめての取り組みとして、沖縄修学旅行において米軍キャンプ家庭での1日ミニホームステイプ

ログラム参加した。これら全ての活動は、そのコミュニケーションが本物であるという点において、生徒にとってスムーズにコミュニケーションが成立するかどうかという不安感もあるが、それ以上の期待感・達成感があり、たとえうまくいかなかったとしても、「次はもっとがんばって英語で伝えたい、英語を理解したい」という意欲をかき立てる最良の教材となっている。

#### 4. ICT機器の活用

昨年4月に一新されたCALL教室においては、様々な機能を使い、生徒が自分のペースで行う自分に合ったレベルの学習活動や、ペアやグループでの活動を行っている。自分に合ったドリル学習を行う、テキストの音声を各自繰り返し聞く、自分のreading音声を保存させ、自分で聞いてチェックさせる、提出させ評価する、ヘッドフォンを通じて様々な生徒と対話するなど、単調になりがちな基本練習を飽きさせることなく行わせることができている。また、与えられたテーマについてインターネットで調べ、即時に発表原稿を書く活動も行っている。普通教室においては、簡易CALLシステムを活用した授業が定着してきている。画像や動画を使った文法導入や、単語やテキストを効果的に映し出し、生徒の興味・関心を持続させることにつながっている。

### III 成果と課題

#### 1. 協同学習と言語活動の充実

協同学習形態の授業で見られる成果を以下にまとめた。

- ①個人の役割を明確にすることによって責任感とよい意味での緊張感をもって学習に取り組んでいる。
- ②役割を果たしグループで課題解決できたときには心地よい達成感と満足感を共有でき、さらなる意欲につながっている。
- ③生徒同士のコミュニケーションについて学ぶ場になり、共通した目標を達成していく中で、小さなぶつかり合いを経験しながらも自然と互いのより良い人間関係を築いていける場となり得ている。
- ④小グループの中では、臆することなく意見を言える、質問しやすい、個々の活動の機会が増えるなど、言語活動を活発に行える要素が多く、言語活動の充実へ向けた取り組みとの相乗効果を生んでいる。

協同学習については、学級全体が発表者や教師の話を静かに聞ける状態にあることが前提である。落ち着きがなく、意識が課題に向いていない状態であったり、異なる意見や立場の弱い生徒の意見を受け入れない空気があったりするとうまく機能しない。本校のように様々な小学校から生徒が寄り集まってくる学校においては特に、協同学習を始める初期の段階での取り組み方が重要ではないかと考える。クラス作りがまだできていないから協同学習ができないというのではない。協同学習によってクラス・学校をよりよいものにしていくために、教科・学年・学校全体が連携して取り組んでいくことが大切である。英語科においては、学力差が大きく開いている子どもたちを十分満足させるための「卓越性」を持った課題を設定することが、昨年度から引き続いての課題である。もうひとつの課題は、生徒の苦手意識の高い「書く活動」、「話す活動」における協同学習の形態を確立していくことである。「聞く活動」、「読む活動」においては徐々に形態が定着しつつある。今年度は、「説明する活動」とリンクする形で、自分が書いたことを話す活動に特に意識的に取り組んだ。今回協議会での反省点をふまえ、さらに研究・改善を図っていきたい。

今年度「説明する活動」を特に意識して取り組みを進めたことで、どうすれば自分の気持ちや考え・事実などを英語で相手に正しく伝えることができるかを生徒に考えさせる機会を多く与え、コミュニケーション活動を行わせることができた。こちらからの押しつけ

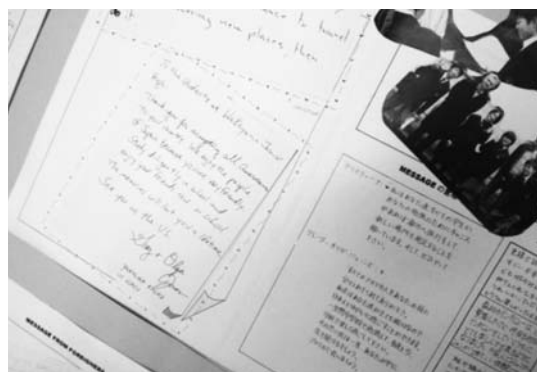




ではなく、生徒同士の気づきの中でよりよいコミュニケーションが生まれるような場の設定を引き続き工夫して行っていきたい。

## 2. 外国人との交流活動とICT機器の活用

1年生では本大学留学生との交流、2年生では京都校外学習という2本柱が定着してきた。今年度初の取り組みとして、3年生での米軍キャンプ1日ミニホームステイも実施した。1年生では、昨年度10名の留学生が訪れ、全体での交流に加え、1グループあたり8～9人という比較的小さいグループでの交流を行うことができた。生徒たちは皆生き生きとした表情で、身振り手振りを交えたり、中には自分で作ってきた折り紙を見せたりしながら、お互い英語を母語としない者同士必死に、そしてとても楽しそうに交流が進んでいた。今後本大学との連携を十分活かし、活動を継続していきたい。これまでは1年生だけの取り組みとしてきたが、他学年でも少しレベルアップした内容で実施することもできるのではないかと考える。2年生での京都校外学習は、本年度東日本大震災の影響により5月実施の予定が延期になり、実施が危ぶ



まれましたが、徐々に状況が改善し、11月に無事実施することができた。「自分たちの英語がきちんと伝わるのか」「相手の話す英語が理解できるのだろうか」といった不安から、生徒たちははじめは話しかけるのに戸惑っていたが、日本や生徒たちに興味を持ってやさしく丁寧に対応していただく中で不安は解消され、コミュニケーションが成立したときの喜びや達成感は非常に大きく、英語学習に対するモチベーションを高めたものとなった。

3年生での米軍キャンプ1日ミニホームステイは、ホームステイを行う際の大きな課題のひとつである「家庭による受け入れ姿勢の差」の問題をどうクリアし、今後実施していくかどうか検討していく必要がある。いずれにしても、外国人と直接コミュニケーションすることは、生徒の意欲を否応なくかき立てる生きた教材であり、本校英語科にとって欠かすことのできない取り組みと言える。昨年、一昨年と来校したロン・クラークアカデミーとの交流や、中国済南市との交流などの機会をうまくとらえ、今後も継続して取り組んでいきたい。

ICT機器を活用した授業の有用性が取り上げられるようになってから、本校においてもCALL教室での授業、簡易CALLシステムを使用した授業にスポットを当て、Ⅱ-4で掲げたような授業研究・教材開発に取り組んできたことで、わかりやすく効果的に教示すること、飽きさせずに繰り返し練習させること、個々の能力に応じた授業展開を行うこと等が可能になってきた。本年度は新しい教材の開発があまり進まなかったのであるが、今後もさらに有効な教材の開発を進めていかなければいけない。また今後は英語科においても、生徒にICT機器をプレゼンテーションなどの場で活用させることが当たり前となるような授業もどんどん取り入れていきたい。

参考文献：中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年9月）

いとなみ 第49集 和歌山大学教育学部附属中学校 2010年

1. 学年・学級 1年D組（男子20人、女子20人）
2. 授業場所 CALL教室
3. 単元名 Unit 6 総合演習
4. 題材について

## （1）教材について

Unit 6 を通じて主語が3人称単数である場合の肯定文・疑問文・否定文を学んできた。日本語にはない、「人称変化によって動詞の語尾が変わる」ということに、はじめ、子どもたちは戸惑っていた。授業中に到達度を確認するために英作文を書かせてみても、

\* He doesn't has a guitar. (彼はギターを持っていません。)

\* Does Ms. Green teaches English? (グリーン先生は英語を教えていますか。)

というような間違いが数人の解答に見られた。その原因を考えると、「主語が3人称単数の場合、一般動詞にsかesをつける。」ということと「主語が3人称単数の場合には、否定文ではdoesn'tを、疑問文ではDoes～?を使う。」ということ意識できているのだが、「否定文や疑問文で、一般動詞は原型で使う」ということまで注意を払っていないと言える。そこで、子どもたちに正しい文法を用いて書く・話すといった主体的な活動をできるだけ多く取り入れることで、自分の言葉として英語を使えるようになるのではないかと考えた。この生徒たちは、夏休みの課題に「自分について」という題名で英作文を書かせたときにも、楽しみながらも200語以上の英文を書いてくるといふ英作文好きである。彼らのその特性を生かし、今回は教材として、自分の好きな芸能人や漫画のキャラクターについて記述し、それを発表するというものとした。

## （2）生徒について

授業を行う1年D組は授業者が担任するクラスである。定期テストの結果などを見ると、理解力は高いと言える。だが、日ごろの普段の授業や学級活動では、他のクラスと比べて比較的快活であり様々な意見が出てくるといふ面があるのと同時に、他者が発言するときにそれに静かに耳を傾けて聞くということが苦手であるという側面もある。この授業において、英語を自分の言葉として説明する活動を行う際には、聞く側の態度に気をつけさせたい。

また、生徒の人間関係については、一部のおとなしい子とほかの子たちの間に少し溝があるように思えるのでこの授業を通して、お互いの好きな人物やキャラクターについて説明し合い、より深く知り合うことで、その溝をなくしたいと考えている。

## （3）指導について

3人称を主語にした文の肯定文、疑問文、否定文を用いることで家族や友人をはじめ、多くの人物や事柄について述べるができるようになり、生徒たちが表現できる内容を一気に広げることができる。この単元では、自分が興味あることや人物について説明するという言語活動を通じて、外国語を自分自身の言葉として使うことの楽しさに気付かせることをねらいとする。そのためには外国語で説明する力、すなわち、自分の持つ情報を「話すこと」や「書くこと」で相手に正確に伝え、同時に相手からの情報を「聞くこと」や「読むこと」で正しく受け止めることが必要である。そのうえで、協同学習を活かしたコミュニケーション活動はその発表の練習に最もふさわしい手法の一つであるといえる。

また、CALL教室のICT機器を活用することで、学習効率を高めるとともに、生徒の授業へのより高い関心を引き出すことが可能となる。

## 5. 単元の指導目標

- ・主語が3人称単数の場合に一般動詞が変化することを理解させる。
- ・主語が3人称単数の肯定文、疑問文、否定文を書けるようにさせる。
- ・自分以外の人物についての簡単な説明ができるようにさせる。

## 6. 単元の具体の評価規準

規準	①コミュニケーションへの関心・意欲・態度	②表現の能力	③理解の能力	④言語や文化についての知識・理解		
聞くこと	(言語活動への取り組み) ア、発表を聞いて、相手の持つ情報を正確に受け止める言語活動に積極的に取り組んでいる。	/	(正確な聞き取り) ア、発表を聞いて、初歩的な英語の情報を正しく聞き取ることができる。	(言語についての知識)		
	(コミュニケーションの継続)		(適切な聞き取り)	(文化についての理解)		
話すこと	(言語活動への取り組み) イ、聞き手を意識し、自分の持つ情報を相手に正確に伝える言語活動に積極的に取り組んでいる。		(正確な発話) ア、既習の文法事項と、3単現を意識して正しく正確に英語で伝えることができる。	/	(言語についての知識) ア、相手に伝わりやすい語句や文の使い分けができる。	
	(コミュニケーションの継続)		(適切な発話)		(文化についての知識)	
読むこと	(言語活動への取り組み)		(正確な音読)		(正確な読み取り) イ、発表の練習を行う際に、班のメンバーの原稿に書かれてある英文の表現を読み取り理解し、間違いがあれば指摘をする。	(言語についての知識)
	(コミュニケーションの継続)		(適切な音読)		(適切な読み取り)	(文化についての理解)
書くこと	(言語活動への取り組み) ウ、発表する材料についてインターネットを活用し、情報を取捨選択しながら意欲的に調べることができる。	(正確な筆記) イ、複雑な表現を避け、聞き手に正確に伝えることができる。	/		(言語についての知識) イ、言語や言語の運用についての基礎的な知識を身につけている。	
	(コミュニケーションの継続)	(適切な筆記)			(文化についての理解)	

7. 単元計画 5時間（本時で5時間目）本時は◎

学習内容	ねらい	中心となる言語活動	評価規準
○自分の好きな人物やキャラクターについて、インターネットを活用し、調べてまとめる。（1時）	○発表するための材料をそろえる。 ○複雑な説明を避けるため、自分が表現できる材料を選択する。 ○発表の際に提示する写真やイラストを探す。	○多くの情報の中から、説明する際に利用できるものを取捨選択する。【感受・表現】	①－ウ ④－ア
○自分の好きな人物やキャラクターについて、和英辞典を活用し、発表の原稿を作る。（2・3時）	○聞き手を意識し、複雑な文法事項や単語を避け、3単現を活用した英文を作る。 ○うまく英語で表現できない部分は、班のメンバーで意見を出し合い、協力し合う。 ○発表の初めと終わりのあいさつを考える。	○相手に伝わりやすい表現を考える。【感受・表現】【評価・論述】 ○班で協力し出し合うことで、自分一人では思いつかない表現を学ぶ。【討論・協同】	②－ア ④－イ
○作成した原稿を清書し、班の発表の練習を行う。（4時）	○適切な声量、話す速度を確かめる。 ○聞き手はより良い発表になるように、発表者にアドバイスをする。 ○聞き手にうまく伝わらない内容は訂正をする。	○作成した文を、班のメンバーに読み上げることで、聞き手を意識した話し方を意識する。【感受・表現】【討論・協同】 ○お互いの発表について意見を出し合う。【討論・協同】 ○相手自分の持つ情報を正確に伝えるために、複雑な表現を避ける。【感受・表現】	②－イ ③－イ
◎自分の好きな人物やキャラクターについて、その魅力を説明するために発表する（5時）	○相手に分かりやすく伝える。 ○相手の説明を正しく聞き取る。 ○ふりかえりシートを通じて、お互いの発表について、感想を伝え合う。	○班単位で作成した文を音読する。【解釈・説明】 ○級友の発表を聞き、メモを取る。必要に応じて聞きかえす。【感受・表現】【評価・論述】	①－ア ①－イ ③－ア

※表中の評価規準については、6の単元の評価規準を示す。

<道徳的視点> 2 - (5) 他者理解

- ・それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。

8. 本時の目標

- ・英語を活用して、自分の興味のある事柄についての情報を正確に相手に伝えられるようにする。
- ・相手からの情報を正しく受け止められるようにする。



## 9. 本時の展開

過程	時間 (分)	学習活動	教師の指導	備考
1、warm-up	5	1. リスニングを行う。 (1年用・聞きトレ64、浜島書店)	○リスニング活動の後、 スクリプトを群読させる。	○授業へのスムーズな 切り換えを行う。 ○授業で使用したプリントはファイルに綴じさせる。
2、導入	5	2. 前時までに書き上げた、自分の興味がある有名人やキャラクターなどを紹介する文を音読する練習をする。	○発表の注意点を伝える。 ・発表者の注意点 ・聞く側の注意点	○練習は班のメンバー同士で行い、お互いの良いところ、改善すべきところを言い合う。
3、展開	30	3. 各班の代表が、クラス全員の前で発表を行う。	○聞いている生徒は感想を用紙に記入させる。	○発表時、写真や具体物を見せてもよい。
4、まとめ	10	4. 感想を発表者に渡す。また、授業のふりかえりを用紙に書く。	○生徒が書いた発表に対する感想をいくつか取り出し、読み上げる。	○ふりかえりを書かせた紙を回収する。

## 10. 結果と考察



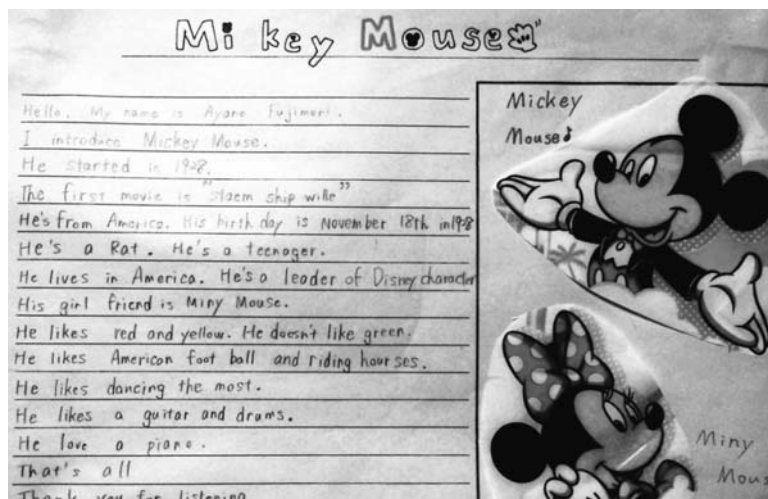
生徒たちは、自分の好きなアイドル、マンガやアニメのキャラクター、スポーツ選手についてインターネットを活用して、とても意欲的に調べた。そして、その調べた内容を日本語から英語に、和英辞典を活用して同じ班のメンバーと協力しながら訳していったのだが、どうしても和訳できないときは、私が手助けを行った。例えば、生徒は「イチローは1973年10月22日に生まれた。」と言いたいのだが、過去形をまだ習っていない彼らには表現できない。そこで「イチローの誕生日は1973年10月22日です。」と主語を置き換えること

で過去形を使わずに表現することができた。

その後、作成した原稿を班のメンバー同士で読む練習を重ね、伝わりにくい表現があれば変更し、文法的な間違いがあれば訂正するといった作業を繰り返し行い、本時を迎えた。

本時で、生徒は静かに発表者の声に耳を傾け、面白い内容であれば笑い、最後に大きな拍手を発表者に送るといった素晴らしい態度で授業を受けることができた。

後の協議会で、授業を見てくださった方々から多くの意見をいただいた。その会で指摘していただいた中で、この授業の良い点としては、  
①中学1年にしてはとても長い英作





文が書けていた。②全員に発表する場面があったこと。改善すべき点としては①もっとクラスルームイングリッシュを使うべき ②聞き手が退屈しない発表の形態はないだろうか ③文法的な間違いが見られた。ということであった。

今回の活動をふりかえると、自分が相手に伝えたい、と強く思える内容を英語で説明するという活動はまずまずできたように思うが、発表する方法と文法的な間違いをいかに少なくするかという課題を残しているように思う。

生徒たちのがんばりに助けられた授業であったように思う。

# 英語科学習指導案

授業者 高 瀬 麻美子

1. 学年・学級 2年A組（男子18人、女子22人）
2. 授業場所 2年A組教室
3. 単元名 Unit 5 A Park or a Parking Area
4. 単元観

## （1）教材について

Unit 5では、ある女の子が駅近くに乱雑に置かれた自転車が倒れてきたことによってけがをし、その事故を受けて公園をつぶして駐輪場にするか、公園を存続させるかの議論が取り上げられている。新出文法事項として接続詞if, that, when, becauseなどが登場することによって、より詳しく「事実を伝える」「意見を述べる」「理由や根拠を述べる」といったことが可能になる。生徒たち自身にとって身近な話題について意見を述べさせたり、聞き手を意識して事実をわかりやすく説明させたりといった言語活動を通して、コミュニケーション能力の育成を図りたい。プラスアルファの教材としてのユニバーサルデザインに関しては、その意味・定義や使用されている事例について知ることにより、日頃あまり意識することが少ないであろう身の回りの様々な事柄に気づかせ、障害の有無や性別、年齢、言語、文化などを問わず、すべての人が暮らしやすい世の中を築こうとする意識を育んでいきたいと考える。

## （2）生徒について

本学級の生徒は、全体的にまだまだ幼いところが多く残っているが、素直で明るくさまざまな学習活動に意欲的に取り組むことができる。外国語活動においては、ペアでの音読や対話練習、グループでの活動等においても概ね活発に取り組める。一方、2年生も後半に入ると、こどもたちの能力や意欲・関心にはかなり個人差が出てきており、残念ながら英語に対して苦手意識が高くなってしまっている生徒も少なからずいる。ひとりひとりの言語能力を互いに補い合い、グループメンバー全員でひとつの課題を達成することによって、メンバーで相互的な気づきが生まれることや支え合うことの大切さに気付かせていきたい。

## （3）指導について

昨年度、本学年の生徒たちは和歌山大学の留学生と交流する活動を行った。英語を母語としないもの同士でも、何とか互いの思いを理解しよう、コミュニケーションを取ろうとする姿が見られ、もっとたくさん英語で話したい、もっと理解したいという気持ちを強くした様子であった。このことが象徴するように、「伝えたい」、「理解したい」という気持ちが前提となり、コミュニケーションはスムーズに成立していく。今回の授業では、ユニバーサルデザインについて書いた文章をただ読んで聞き手に伝えたり、書いた文を丸暗記して伝えたりするのではなく、ユニバーサルデザインの商品や施設を売り込むPR文を書き、クラスのメンバーにその魅力をいかに伝えるか、という課題を設定し、伝えたい内容を自分のものにした上で、聞き手を意識して適切な声量で明瞭に話す、大切なところは強調して話す、聞き手がわかりにくいところは繰り返し話す、聞き手はわからなければ質問する、といった有機的・相互的なコミュニケーションをねらいとした。テキストの読み取りや発表文の作成に関しては、協同学習の手法を取り入れ、少し難易度が高くても、メンバーと協力し合うことで課題を達成することができたという経験を積ませたい。また、来月予定している京都校外学習でのインタビュー活動にもつなげていきたい。

## 5. 単元の指導目標

- ・接続詞を用いた複文などを用い、聞き手を意識し的確な英語を使って、学校のルールについて自分の考えを理由とともに伝えたり、ユニバーサルデザインについて調べた内容を相手にわかりやすく正しく伝えたりさせる。

- ・身近な問題についての記事を読み、賛否やその理由を示したりできるよう書かれた内容や概念を理解させたり、まとまりのある英語を聞いて概要や要点を聞き取らせる。

## 6. 単元の具体の評価規準

規準	①コミュニケーションへの関心・意欲・態度	②表現の能力	③理解の能力	④言語や文化についての知識・理解
聞くこと	(言語活動への取り組み)		(正確な聞き取り)	(言語についての知識)
	(コミュニケーションの継続)		(適切な聞き取り)	(文化についての理解)
話すこと	(言語活動への取り組み)	(正確な発話)		(言語についての知識)
	ア、適切な声の大きさ、アイコンタクト、必要に応じて繰り返すなど聞き手にわかりやすく説明しようとしている。			ア、ニュース番組の英文を聞き、概要を理解している。
	(コミュニケーションの継続)	(適切な発話)		(文化についての知識)
		ア、学校のルールに関する自分の意見やその理由、ユニバーサルデザインの使用例について、聞き手に正しく伝えることができる。		
読むこと	(言語活動への取り組み)	(正確な音読)	(正確な読み取り)	(言語についての知識)
			イ、ある話題に関する記事を読み、内容・概念などを理解している。	
	(コミュニケーションの継続)	(適切な音読)	(適切な読み取り)	(文化についての理解)
				ア、ユニバーサルデザインについての知識・理解を深め、身近な使用例や周囲の様々な人々の生活に関心を持っている。

書く こと	(言語活動への取り組み)	(正確な筆記)		(言語についての知識)
		イ、既習の接続詞を使った複文などを用いて、学校のルールに関する意見やユニバーサルデザインの使用例について英語で正しく書くことができる。		イ、接続詞を用いた複文の構造を理解している。
	(コミュニケーションの継続)	(適切な筆記)		(文化についての理解)

## 7. 単元計画9時間（本時は9時間目）

学習内容	ねらい	中心となる言語活動	評価規準
○接続詞を用いた複文の構造の理解 ○テキストの内容理解 ○ニュース番組の聞き取り（第1～5時）	○if節、that節、when節、because節の文の形、意味、用法を理解する。 ○グループでテキストの内容を読み取る。 ○まとまった英文を聞いて概要を聞き取る。 ○身近な事柄についての自分の意見を理由とともに説明する。	○記事を読み取り、内容に関するQ & Aを行う。【討論・協同】【理解・伝達】 ○ニュース番組の英文の概要を聞き取る。【理解・伝達】 ○自分たちの学校のルールについて、意見交換を行う。【解釈・説明】	④－イ ③－イ ③－ア ②－ア
○ユニバーサルデザインについての記事の読み取り（第6時）	○ユニバーサルデザインについての知識・理解を深める。 ○すべての人が暮らしやすい世の中を築くとはどういうことか考える。	○4人グループで記事を読み取り、記事の要旨を完成させる。【討論・協同】【理解・伝達】	③－イ ④－ア
○ユニバーサルデザイン使用の商品についてのPR原稿作成（第7、8時）	○写真や絵の内容について、その特性や特長などを相手にわかりやすく説明する英文を書く。	○グループで協力して、ユニバーサルデザイン使用の商品についてPRする英文を書く。【解釈・説明】	②－イ ④－イ
◎ユニバーサルデザインの使用例（商品）について発表	○相手にわかりやすく説明する。 ○メモを取ったり質問したりしながら説明を聞く。 ○説明の仕方や内容について相互評価を行う。	○相手がわかりやすいよう工夫をして説明する。【解釈・説明】	①－ア ②－ア

※表中の評価規準については、6の単元の評価規準を示す。

### (道徳的視点) 4 - (10) 国際理解、人類の福祉

障害の有無や性別、年齢、言語、文化などを問わず、すべての人が暮らしやすい世の中を築こうとする意識を育む。

## 8. 本時の目標

聞き手を意識した確かな英語を使って、ユニバーサルデザインについて相手にわかりやすく正しく伝えられるようにする。(話すこと)

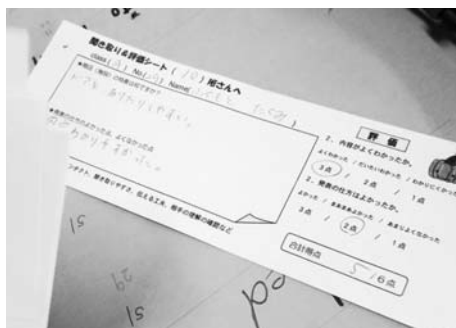


## 9. 本時の展開

過程	時間 (分)	学習活動	教師の指導	備考
1、warm-up	5	・挨拶をする。 ・チャンツをする。	・挨拶をする。 ・英語学習の雰囲気を作る。	コンピュータ プロジェクタ スピーカー
2、導入	5	・グループ内で発表練習を行う。 (工夫する点を確認しあい、リハーサルを行う。)	・絵や写真、実物を示す、適切な音量で明瞭に話すなど、聞き手に理解してもらいやすいよう工夫させる。	ワークシート 1
3、展開	35	・ユニバーサルデザインの商品をPRする内容のグループ発表を行う。(4名×10班) ・ワークシート2に、発表を聞いてのコメントを書く。	・聞き手にわかりやすく話すように意識させ、より良い発表となるよう改善させる。	視覚提示教材 コンピュータ プロジェクタ 実物投影機 ワークシート 2
4、まとめ	5	・本時の振り返りを行う。 (発表の仕方について相互評価する。)	・発表の仕方について相互評価させる。	ワークシート 2

## 10. 結果と考察

授業始めに日頃からチャンツを取り入れている。どのクラスでも、個人の差はあるが概ねリズムに乗って楽しく声を出せており、自然に英語らしいイントネーションやリズムを身につける効果を実感している。今回行ったチャンツは少し難易度が高く、二度目の実施であったが十分声を出させることができなかった。



また、起立させる、ペアで向かい合わせて立たせる、ペアを変えてみるなど「チャンツをするぞ」という雰囲気作りの工夫も必要であった。

教科を貫く共通テーマとしての「説明する」活動に関しては、「聞き手にわかりやすいように伝える」ことを目標とし、多くのグループはパワーポイントや書画カメラなどを用い、絵や図、寸劇など言語以外の要素も用いて説明し、聞き手を意識したものとなっていた。十分とは言い難いが、わかりやすい言葉で言いかえる、繰り返し言うなどができていたグループもあった。また評価

用紙を工夫したことで、それをグループにフィードバックしたときに、聞き手にどれだけ伝わったか知らせることができた。反省点の一つとして、事前の原稿作成と発表練習の時間が十分でなく、英語らしい発音・イントネーション等についてよくできていなかったことがあげられる。これについては、協議会でもご意見をいただいたように、たとえばALTを活用してチェックしてもらい、インターネットの音声ガイド付き辞書を活用させるなどの方法をとることで、40人という人数に対しても、短時間でも改善させることが十分可能であるだろう。また、4人グループで作ったものを全体に発表する形をとったことで、発表前のグループ練習で英文の読み方をメンバー同士で教え合う姿、発表中はそれぞれが自分の役割を必死に果たそうとする姿が見られ、協同的な学びのスタイルがうまく機能していた。メンバー一人が欠けても成立しない卓越性のある課題を設定し、協同学習を取り入れた生徒がわくわくするような自己表現活動のための教材研究に今後も取り組んでいきたい。



